

一八八二年十月二十七日(金)

ケーシャブ・チャンドラ・セン氏とタクール、聖ラーマクリシュナの楽しい
船旅——喜びと会話

タクール、聖ラーマクリシュナ、サマーディ境にて

今日はコジヤーガル^(訳註)、ラクシュミー・プージャの日である。キリスト暦一八八二年十月二十七日、
金曜日。タクールは、南神村^{トッパネーシヨル}のカーリー殿内にあるあの馴染みの部屋に坐っておられる。ヴィジャイ
(・ゴースワミー)とハララルを相手にお話をしていらつしやるところである。一人の男が入ってきて、
「ケーシャブ・センが汽船で沐浴場^{ガイト}に到着しました」と申し上げた。やがて、ケーシャブの弟子たち
が数人来てごあいさつした。「先生、船が到着しました。どうぞお越し下さいませ。少し遊覧いたし
ましょう。ケーシャブ様は汽船におられますから、私共がご案内いたします」

時計は四時を打った。タクールは小舟^{ボート}で汽船のところまで行かれ、お乗りになるのだ。ヴィジャイ
がお供をした。小舟^{ボート}に乗られるとすぐ、外界の意識を失われたのである！ 三昧^{サマーディ}に入られたのだ！

校長は汽船の甲板に立つて、この三昧^{サマーディ}の様子を拝見していたのである！ 彼は三時ころケーシャブ

の船に乗り込んで、カルカッタから来たのである。タクールとケーシャブの交歓こうかんをこの目で見、お二人の会話をこの耳で聞きたいと心から希望してのことであつた。ケーシャブの人格とその講演で述べた言葉の数々は、校長のみならず、多数のベンガル青年の心を強烈につかんでいる。また多くの人々が最上の友として彼を心から敬愛している。ケーシャブはイギリス式の教育を受けた人で、西洋の哲学や文学作品に精通している。また彼は、神々や女神たちを拝むのは、偶像どころか人形崇拜であると、以前から繰り返して強調していた。このような人物が、聖ラーマクリシュナを心から尊崇して、何度もタクールをお訪ねしているのであつた。これは実に驚嘆すべき出来事だ。

御両人の心がどの点で一致するのか、或いは、どんな具合に調和しているのか、その秘密は、校長のほかにも多くの人たちが不思議に思い、ぜひ解明したいと願っているのである。タクールは無相の实在、つまり無形の神を信仰する人々に賛成し、また同じく、人格神、つまり有形の神を信奉する人々にも賛成する。ブラフマン（無相の实在）を冥想し、また、神々や女神の像の前に花や白檀香を捧げて祈り、神の愛に酔いしれて歌ったり踊ったりなさる！ 小型のベッドにお坐りになって、身にお付けになるものは赤い縁取りの下衣カボル、上衣、靴下、靴。だが、世間的なことは一切なさらない。気持ち

（訳註1）コジャーガル——コーは、誰、ジャーガルは、起きるの意で、起きているのは誰か？ という意味で、アッシン月の満月の日に祈りを捧げている者にラクシユミー女神が祝福を与えてくれ、信者は断食をしてラクシユミー女神を礼拝する日。

全くの出家サンニヤシそのものである。であるから人々は、このお方を大覚者と呼んでいる。一方ケーシヤブは、無相の实在を信奉し、妻もあり、息子もあり、世間並みの生活をし、英語で講演や講義を行い、新聞を書き、世俗的な仕事もしている。

ケーシヤブの指導する大ぜいのブラフマ协会会员たちは、船から神殿の美しいたたずまいを眺めていた。船の東方、さほど遠からぬところに煉瓦造りの沐浴場ガイトと神殿の石だたみがある。乗客たちの左側——石だたみの北には十二のシヴァ堂のうち六つのお堂が並び、南にも六つ並んで建っている。秋こんばきの紺碧の大空を背景に、バヴァタリニー(救いの女神の意—カーリー女神)の神殿の小尖塔と、その北の五聖樹パンチャパテイ杜および、ジャウ樹の茂みが望見できる。バクル樹台タラの近くに一つと、カーリー殿の南端に一つ、音楽塔が見える。この二つの音楽塔の間にある庭路には、どこもかしこも花の咲いた樹が両側に並んでいる。秋空の絵具を塗ったような青さがガンガーの水に照り映えている。

外の世界も美しくやさしく、ブラフマ協会の会員たちの心も優しく和なごんでいる。頭上には果てしなく広がる紺青こんじょうの空、前面には優美な神々の館やかた、下は聖なる水ガンガー、その岸辺いにしえに古来より、アーリア民族の聖賢たちは日夜、神を瞑想しておられたのだ。更に、その永遠サウクナ・ダレマの真理の化身ダルシヤンであるところの一つの偉大なる魂が、ここに見えようとしているのだ。このように幸運な機会サマーティは、人の一生において滅多にあることではない。このようなところに、三昧に入サマーティった大聖者が出現なさったのであるから、岩のような心臓の持ち主でも、感激のあまり胸が震えて溶けること請け合ひである。

三昧サムライ、真我マウジは不滅——パオハリ・ババ

人が古くなった衣服を捨てて

新しい別の衣服に着替えるように

魂は使い古した肉体を脱ぎ捨て

次々に新しい肉体を着るのだ

——ギーター 2—22——

小舟ボートがこちらへ進んできた。皆はタクール、聖ラーマクリシュナを見ようとして、我先にと手摺りに殺到した。タクールを無事に船にお移ししようとして、ケーシャブは氣を揉もんでいた。やつこのことでタクールは外界の意識を取り戻して、船室の中に連れ込まれた。まだ放心状態もで、一人の信者に支えられていらつしやる。機械的に足を動かしておられるだけである。キャビンの部屋にお入りになってケーシャブたちがごあいさつをしたのだが、少しもお気付きにならぬ様子であった。船室にはテーブルが一つと椅子が数脚置いてある。一つの椅子にタクールを坐らせ、ケーシャブも椅子に腰掛けた。ヴィジャイも腰掛けた。ほかの信者たちは床に坐った。多くの人は場所がなくて室外からのぞいている。タクールはお坐りになると、また三昧状態もになられている！ 全く外界の意識を失なくされているのだ！ 一同は身じろぎもせず、その様子を見ている。

ケーシヤブは室内に人が多いので、タクールが不快なのではないかと思った。ヴィジヤイはケーシヤブから離れてサーダーラン・ブラフマ協会サマシの会員になり、(ケーシヤブの)娘の結婚などの事を批判した講演を何回も行っているので、ヴィジヤイと顔を合わせて、ケーシヤブはいささか困惑の態であった。彼は立ち上がって部屋の窓を開けた。

ブラフマ協会の会員たちは皆、食い入るようにこの場の光景を見つめていた。タクールの三昧状態は解けてきた。が、まだ神の酔いは完全に醒めてはいない！ タクールは独り言を低くつぶやいておられる——「大実母マ、わたしを何故ここへ連れてきたの？ この人たちを囲いの中から出してやること、わたしにできるだろうか？」

タクールは、世間の人々が囲い塀のなかにつながれていて、外に出ることができない。外の光も見ることができないでいる。誰もが世俗の仕事に手足を縛られている有様を見通されたのであるのか？ ただ建物の中の品物だけに目を向けて、人生の目的は、肉体上のよろこびと世俗的な仕事だけ、つまり、女メと金カネだけだと思つてゐることを——。だからタクールは、このようにおっしゃつたのだらう——「大実母マよ、わたしを何故ここへ連れてきたの？ この人たちを囲いの中から出してやること、できるかしら？」

タクールは次第に、外界の知覚を回復してこられた。ガジープルのニール・マータヴァアさんと一人のブラフマ会員がバオハリ・ババの話をしていた。他の一人がタクールに向かつて——

「先生、この人たちはいっしょに、バオハリ・ババに会いに行つたのでございます。ババはガジープ

ルに住んでおられましてね、あなた様と同じような御方です」

タクールはまだ、話が十分にできる状態ではなく、ただ、かすかに微笑まれたただけであった。そのブラフマ会員はまた、タクールに――

「先生、パオハリ・ババは、自分の部屋にあなた様の写真を飾っておられますよ」

タクールはまた微笑んで、自分の体を指しながらおっしゃった――

「枕カバーだよ！」

智慧のヨーガ、信仰のヨーガ、奉仕のヨーガの合一

サーンキヤを通じて到る境地には

ヨーガによっても達する

この二つを不異おなじと見る人は

事物の真相を了解した賢者である

―― ギター 5―5 ――

サーンキヤ――物質界の哲学的分析研究

ヨーガ――カルマ・ヨーガ、バクティ・ヨーガ

などの修行

「枕と枕カバー――魂と肉体。タクールは、肉体はいずれ朽ち果てるものだ、ということをおっしゃったのだろうか？ 肉体のなかに宿る魂こそ不滅であり、従って肉体の写真など持っていて何の役に立つのか、ということ？ 無常のものである肉体に敬意を払ったとて何になるのか？ むしろ、

アンタルヤミシ
 人なる導き手として人間の心の奥に宿っている、至聖なるものを礼拝することこそ必要なのである、
 ということを？

タクルルは平常に戻られて、次のように語られる。

「けれども、一つ話すことがある。それは、信者の胸は神様の住居だということ。あの御方はあらゆる場所にいらつしやることは確かなんだが、信者の胸の中は特別だ。地主は自分の領地のどこにでも住むことが出来る。だが、いつもは決まった応接間にいるという話だよ。信者の胸は神様の応接間だ」
 一同は、見るからに嬉しそうな表情になった。

〔二つの神に様々な名前、智者、ヨーギー、および信仰者〕

聖ラーマクリシュナ「智者がブラフマンと呼んでいるものを、ヨーギーたちはアートマン(真我)といい、そして信仰者たちは至聖の御方と呼んでいる。

同じバラモンでも、神殿で礼拝しているときは司祭と呼ばれるし、料理をしているときはラドニパヌン(バラモンの料理人)と呼ばれる。智慧のヨーガを修行している智者は、(実在は)これではない、これでもない、と決めつけていく。ブラフマンはこれではない、あれでもない。生き物ではない、世界でもない、という具合に打ち消し続けて、しまいに心が寂靜になり、無心になって三昧に入る。そして、ブラフマン智に達する。ブラフマン智を得ようとする人の正しい考えは、ブラフマンのみ真実、この世界は虚仮だということ。すべての色と形は夢まぼろしだということ。では、ブラフマンはどん

なものかといえ、それは口で説明できない。人格神があるかどうかということさえ言えない。智者たち、たとえばヴェーダーンタ派の人たちはそんなふうには言っている。

だが、信仰者たちはあらゆる状態を受け入れる。目覚めている間も真実だという。世界は幻だなどと合わない。信仰者たちは、この世界は至聖の力の顕われだという。大空、星々、月、太陽、山や岩、海、生きとし生けるもの、何もかもすべて神様のお働きだ——。あの御方のすばらしい豊かさの現れなのだ——。あの御方は自分の奥深く胸の内にもいらっしやるが、外界にだっぴらっしやる。最上の信仰者は、あの御方こそ二十四の原理——生物と世界に成っぴらっしやるのだと言う。信仰者の望みは砂糖を舂めることで、砂糖そのものになっぴらっしやるのは嫌いだ（一同笑う）。

信仰を持った人たちの気持ちがわかるかい？ 神さんよ、あなたは御主人、私はあなたの召使い。あなたは母さん、私はあなたの子供。または、あなたは私の父と母。あなたは全体、私はあなたの一部分。こういう気持ちなんだ。私はブラフマンだ——なんだという気は全くないんだ。

ヨーギーも至上我に對面しようとして一生懸命働んでいる。ヨーギーの目的は、個我（この肉体に宿る魂）を至上我と合一することだ。ヨーギーは世の中のことから心を引っだめて、至上我に心をピタリと合わせて動かないように努力する。だからはじめのうちは、人里離れた静かな処で、堅固な心で座を組んで、精神を集中して瞑想する。

けれども、本体はただ一つだよ。名前が違うだけだ。ブラフマンがアートマンで、それが至聖（バガヴァン）だ。ブラフマン智者者のブラフマンがヨーギーの至上我で、信仰者の至聖（バガヴァン）だ」

ヴェーダとタントラの調和——アディヤシャクティ根元造化力の豊饒ほうじょう

あなたは精妙であり かつ粗大

あなたは顕現にして 非顕現

あなたは形があつて また形がない

そんなあなたを どうして知り得ようか

—— マハー・ニルヴァーナ・タントラ 4 — 15 ——

蒸気船は一路、カルカッタに向かつて進んでいた。船室の中で聖ラーマクリシュナに面と向かい、その天上の甘露したたる言葉に耳を傾けている人には、船が動いているかどうかさえ気が付かなかつた。蜜蜂は花に止まると、もうブンブン言わない。

船は次第に南神村トフキネンシヨルから遠ざかった。美しい寺院の景色も眼界の外になつた。船の外輪は、青みがかったガンジス河の水にあぶくを立てながら進んでいった。信者たちの耳には、その波の音も一切届かなかつた。かれらは魅いられたように眺めていたのである——ニコニコ笑う顔、喜びに満ちて聖なる愛に輝く眼、一目見たら好きにならずにはいられぬような、何とも不思議なこのすばらしいヨーギーを！彼らは、魂を奪われたようになって見入つていたのである——すべてを捨てた、この愛すべき一人の放棄ブアイラギーの御方を！ 神のこと以外は何も知らない人を！ 一方、タクールのお話は続いている。

聖ラーマクリシュナ「ヴェーダーンタ派なんかのブラフマン智の行者たちはこんなふうと言う。創造、維持、破壊、そして生物と世界——こういうものはすべてシャクティ(造化力)の遊戯である。よく考えて判断していけば、すべてのものは夢まぼろしである。ブラフマンだけが実在で、ほかはみな非実在だ。シャクティでさえ夢のようなものであつて実在ではない」とね。

けれども、何千何万回考えて決心してみても、三昧にならない限りはシャクティの領域から逃れる方法はない。私は瞑想している、私は考えている、などというのも、すべてこれシャクティの領域でのこと、シャクティの勢力の中でのことだよ。

だから、ブラフマンとシャクティは不異だというのだ。一つを思つたら、もう一つの方も思わずにはいられない。ちようど火とその燃える力のようなものでね——火を心に思い浮かべると、燃える力もいっしょに思うことになる。燃える力を除けて火を想像することは出来ないし、火のことを言えばどうしても燃える力を思うことになる。太陽といえれば日光が心に浮かんでくるし、日光がなくては太陽を考えることは出来ない。

牛乳はどんなものかね？ 考えるまでもない。牛乳がなくては牛乳のあの白さを思い浮かべることができない。そして、牛乳の白さなしには牛乳を思い浮かべることが出来ない。

だから、ブラフマンなしにシャクティを考えることは出来ないし、シャクティなしにブラフマンを考えることは出来ない。永遠なものなしには変化を、変化なしには永遠なものを思うことは出来ないんだよ！

根元造化力は変化と活動の女神だ。創造し、維持し、破壊している。その力のことをカーリーと呼ぶのだ。カーリーこそブラフマンで、ブラフマンこそカーリーなんだ！ 唯一つの本体が動かないとき——つまり、創造、維持、破壊の仕事をしていなさらぬと考えるとき、その御方をブラフマンと呼ぶ。その御方がそうした活動をなすついているときには、カーリーとかシャクティと呼ぶ。その御方はただひとり。名前とポーズが違うだけ。

水のことを、ジャルともウォーターともパーニーともいうようなものだ。一つの池に三つ水汲場がある。一つの水汲場でヒンドゥー教徒たちは水を飲んでジャルと呼ぶ。ほかの水汲場でイスラム教徒たちは水を飲んでパーニーと呼ぶ。また別の水汲場でキリスト教徒たちは水を飲んでウォーターと呼ぶ。三つとも一つのものなのに、名前だけ違うんだよ！ あの御方のことをアッラーと呼んでいる人もあれば、ゴッドと呼んでいる人もあり、ブラフマンと呼ぶ人も、カーリーと呼ぶ人もある。ラーマ、ハリ、イエス、ドゥルガーなどと呼んでいる人もある」

ケーシャブは微笑みながら——

「カーリーはどんな様相でお遊戯になるのか、お話し下さいませんか」

〔ケーシャブとの話——マハー・カーリーとその創造の次第〕

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハ——あの御方はいろんな様子でお遊びになるよ。あの御方がマハー(偉大な)・カーリー、ニティヤ(常住の)・カーリー、シユマシヤナ(火葬場の)・カーリー、ラクシヤ(守

護の)・カーリー、シャーマ(黒い)・カーリーなんだ。マハー・カーリーとニティヤ・カーリーのことはタントラの聖典に出ている。まだ創造が行われないうち、月も太陽も地球もなかったとき、深い深い真つ暗闇のとき、このとき、ただ大実母は形のないマハー・カーリーで、マハー・カーラ(時間・思)(絶対神シヴァ)といっしょに存在していた。

シャーマ・カーリーは大分やさしい様子をしていて、恐れることはないと言って恩恵を与えてくれる神だ。在家の人の家庭で礼拝されている。醜い流行病、飢饉、地震、日照り、洪水などのときにはラクシャ・カーリーに祈ったらい。シユマシヤナ・カーリーは破壊力の化身だ。死骸、山犬、女鬼、女修道者なんかに囲まれて火葬場に住んでいる。口から血を流して、首には頭骸骨で出来た首飾りをして、腰には人間の手を連ねた帯を締めている。世界が減びるとき、宇宙の終末がきたとき、大実母は創造の種を拾い集めて蔵しまっておきなさる。主婦のそばにはいつも古ぼけた容れ物があつて、そのなかに主婦おとよはいろんな種類の小物を入れて置いておくようなものだ」

ケーシャブはじめ一同は大笑いした。

聖ラーマクリシュナ「アツハハハハ、そうなんだよ！ 主婦たちはそういう容れ物を持っている。中には海の泡だの(海岸で見つかるイカの骨や美しい貝ガラなど)、青い色をした丸薬だの、キュウリの種、カボチャの種、ヒョータンの種なんかを入れた小さな袋がしまつてあつて、必要に応じて取り出すんだよ。大実母マブラフマニー(カーリーの別名・大霊)は創造破壊の後で、そうしたいろんな種をみな拾い集めておきなさる。創造の後では、根アディヤクテイ元造化力はその宇宙世界のなかに住んでいなさるんだよ！ 世

界を生み出して、そしてその世界のなかに住んでいらつしやるのだ。ヴェエダにあるクモの話——ほら、クモとクモの糸の話だ。クモは自分の中から糸を吐き出して網を張り、そして、自分はその網の上に住んでいる。神様は世界の容器いれものでもあるし、中身でもあるし、両方なんだよ」

〔カーリー・ブラフマン——カーリーは無性であり、又あらゆる性質をもつ〕

「カーリーはどんな色の肌だと思ふ？ 遠くから見ると黒く見えるが、よく見ると黒くはない。空は遠くから見ると青い。そばへいってよく見てごらん、どんな色でもないから。海の水だつて遠くからは碧あおいけれど、そばへいって手ですくってみてごらん、色なんかありやしない」

このように語られて、神の愛に酔つたように、聖ラーマクリシュナは歌をうたい始められた。

私の大実母かあさま 黒いのか

黒い肌したハダカの女

胸の蓮座ひに灯をともし

この世は如何に？

サットヴァ ラジャス タマスによつて

形成され、そして幻惑されている万有は

これら三性質を超越しているわたしを知らない

無限のエネルギーマをもつわたしを認識できない

——ギーター 7—13——

聖ラーマクリシュナはケーシャブその他に向かい、

「束縛と解脱、二つともあの御方のなさること。あの御方のマールヤで世俗の人間となり、女と金に縛られる。そしてあの御方のお慈悲があつてはじめて自由人（解脱した人）となる。あの御方は縛られている者を解放する御方、救いの女神だよ」

こうおっしゃって、楽神（ガンタルヴァ）も裸足で逃げ出すような世にも美しいお声で、ラームプラサードの宗教歌をおうたいになつたのである。

この世の市場のただなかに シヤーマ母さまタコあそび

希望の風に上がりゆく 風をつなぐは執着の糸

枠はそのまま骨と筋 三つの性質の紙貼つて

世間の地面にしつかりと 糊つき糸でつながれて

罪と徳とが入り乱れ 重さ軽さも自分から
律義りちぎなのやら阿呆あほうなのやら 堂々めぐりの輪をかいて

いく百万のタコのうち 一つ二つの糸が切れ

飛びゆく風をながめては 母かろさま手を拍うち大笑い

解なき放されたその風は 憂うき世の海をひとつ飛び

南風なんぷう順風 気持ちよく 楽しい彼岸あちらに行きました

あの御方は、遊ぶこととフザけることが大好きな女神なんだよ！ この世はあの御方の遊リイラ戯イなんだ。何でも自分の思う通りになさって、あの御方の意志が宇宙の法則なのだ。そしていつも歓喜よろこびに満ちあふれている。百万人に一人くらいを解放して下さる」

ブラフマ会員「先生、あの御方はその気になりさえすれば、すべての人間を自由にするのがお出来になるのに、どういうわけで私どもをこの世に縛りつけてお置きになるのですか？」

聖ホーラーマクリシュナ「あの御方のお希のぞみだからさ。あれもこれも、あらゆるものを持つて遊ぶのがあの御方のお希のぞみなんだよ。」

鬼ババに最初から触ってしまえば、鬼ゴッコはできない。皆が触ってしまえば、もう遊ばれないだろう？ 皆に触られたんじや、鬼ババは面白くない。遊びが続いているのが、鬼ババとしてはたいそう満足で楽しいのだ。だから、〃百万のなか一つか二つ、切れて飛びゆく風を見て、大実母¹は手を拍ち大笑い〃

一同、安心したような表情になる。

「あの御方は（人間の）心に流^{ウイック}し目をしてうなずいて、〃お行き、今のところはこの世を楽しんでおいで〃と言つて下すつたのだ。心に何の責任がある？ あの御方が、またお慈悲によつて心を戻して下さる場合は、そくなればこの世の煩^{わづ}いから自由になれる。そのときは又、心はあの御方の蓮華の御足に戻つて安らぐんだよ」

タクールはご自分が世俗にまみれている人のように、いかにも悩ましがな様子で大実母¹に歌を捧げた。

私は悲しい 情けない――

あなたという母親がついていて

しかもはつきり目覚めているのに

我が家に盗人が忍びこむとは

あなたの名を称えようと

思っているのに時々忘れる

でも私は知っている、気付いてる

この心 この希望 みんなあなたの計画たくらみだ

何も与えず 持たせず、取らず 減さず

それは私に何の責任もない

与え 持たせ 取り 減ほすというなら

いつも与えては取り上げるのがあなたの遣り口や

名声 悪評 甘味も苦味も

すべてあなたの楽しみ気まぐれ

ああ 自分は離れて高見の見物

なぜそんなにいつもふざけていたのか

ブラサードは言う——大実母ママは我らに

心を与えて魅惑の流し目

創造の夢の世界を駆けまわり

焼ける思いを楽しんでおいで——と

「あの御方のマールヤー（幻象）に惑まどわされて、人はこの世であくせくしているのだ。プラサードは言っている。心を与えて魅惑の流し目」

〔カルマ・ヨーガに関する教訓——世俗的仕事と無私ニシユカマ・カルマの仕事〕

ブラフマ会員「先生、何もかも全部捨ててしまわなければ、神に触れることはできないのですか？」
聖ラーマクリシュナ「アツハツハツハ、そんなことないよ！なぜ全部捨ててしまわなけりゃならんのかね？お前たちはちようどいい湿しめり具合だよ、いい頃合いだ（一回笑う）。そんなふうでいいんだよ。ナスクって遊び（持ち点が十七以上になると上がるカード遊びゲイルム）を知ってるだろ？わたしは最高の点数を稼いだので除のけられました。お前たちは利口だ。ある人は十点、ある人は六点、ある人は五点、みんな最高の点じゃなくない。だから、わたしみたいに外はずされることはない——遊びが続けられる。結構なことだ（一回笑う）。

実際のはなし、この世で暮らしているのはちっとも悪いことじゃない。だが、心はいつも神様の方に向けていなさい。そうしないとダメだよ。片手でこの世の仕事をして、片手でしっかり神様につかまっていなさい。仕事が終わったら、両手で神様をつかまえるんだよ。

心がすべてなんだよ。心で縛られ、心で自由になる。心はね、ひた浸した色に染まるんだよ。洗濯屋にある布のようなものだ。赤く染めれば赤く、青く染めれば青く、緑色に染めれば緑色になる。どんな色の染料に浸してもその色に染まる。(訳註——その当時、ベンガル地方では洗濯屋が染め物もやってた)

「ごらん、すこし英語を勉強すると、すぐ口から自然に英語の言葉が出てくる。フット・ファット、イト・ミットなんてね(一同大笑)。その内、足には長靴ブーツを履いて、口笛で歌を吹き出す。すべてこんな風なものだよ。それからほら、学者がサンスクリットをやりだすと、すぐにサンスクリットの詩句をベラベラと並べる。大抵の人は、悪い仲間に入るとその連中と同じようなしゃべりかたや考え方になつてくる。信心深い人の仲間に入ると、神様のことについて考えたり、ハリの話をするようになる。心の持ちようがすべてだよ。一方には女房、一方には子供だ！ それぞれ違った気持ちで可愛がる。だが一つの心だ」

ブラフマ协会会员たちに対する教訓——キリスト教、ブラフマ協会と罪の話

あらゆる宗教の形式を斥けて

ただわたしを頼り 服従せよ

わたしはすべての悪業報から君を救う
怖れることは何もないのだ

井戸を見つけてそばへ行つて見たら、一人の男が立っていた。『これ、私に壺一杯の水を汲んでくれんかね？ お前のカーストは何だ？』と彼に声を掛けたら、彼が答えるには、『尊いお坊さま、私は賤しいカーストの身分で、靴を作っている者でございます』クリシュナキシヨルは言った。『大神シヴァの御名を称えろ。さあ、もう構わない、水を汲んでおくれ』

神の名を称えると、人間の身体と心はすべて浄められる。それなのに罪だとか地獄だとか、そんなことばかりで言っているのは一体どういうわけだろう？ 一度こう言えはいんだ。神様、間違つた事をしましたが、二度とこういうことはいたしませんと。そして、あの御方の名を信じ切つていればいいんだ』

タクールは神の愛にうつとりなさつたような様子で、偉大な魂を讃えて歌われた。

ドウルガー ドウルガーとわれ呼べば

死も貧賤も何のその

神の救いを疑わず

わたしは大実母に、ただ信仰だけを求めて祈っていたものだ。花を手にもつて大実母の御足に捧げて、こう申し上げたものだよ。大実母よ、さあ、あなたの罪を取り上げ、あなたの徳を取り上げて、わたしに純粹な信仰を下さい。あなたの智慧を取り上げ、あなたの無智を取り上げて、わたしに純粹

な信仰を下さい。あなたの清浄を取り上げ、あなたの不浄を取り上げて、わたしに純粋な信仰を下さい。あなたの正義を取り上げ、あなたの不正義を取り上げて、わたしに純粋な信仰を下さい」と

そしてブラフマ会員たちに向かつて――

「どれ、一つブラサードの歌をきいてごらん」

「カーリー　カルバタルの根元に

心よ　行つて四つの実を摘もう

カルバタル――万願成就の木

四つの実――正義、富、愛、解脱

ブラヴリッパティ、ニヴリッパティ
欲クと、無欲クの二人の妻のうち

無欲クの妻を連れてゆき

クヴィヴェカ
識別クという名のその息子に

真理の道を探ねよう

浄クと、不浄クの二人の妻と

楽しい部屋に寝るのはいつか

張りあう二人が仲よくなれば

おんハは
大実母シャーマが顔を出す

虚栄と無知は父と母

おまえの家から出て行かせ

愚痴の洞穴ほらひきこまれるな

忍耐の柱にすがりつけ

善ダルマと悪アダルマ 一匹の雌山羊は

無意味クの杭くいに結びつけ

それでも メーメーさわぐなら

智慧ジュニヤナの剣で切り捨てよ

最初(欲)の妻の子供らは

遠くに離して説とき伏せよう

それでも納得せぬときは

智ジュニヤナの海原うなぼらに沈ませよ

ブラサードは言う——このようにすれば

カーリーの御許に報告書がとどき

愛する御方(神)に選ばれて

こよなき勝友ともと呼ばれよう

世間で生活していたら、なぜ神がつかめないのかね？ ジャナカ王は成功したよ。ラームプラサードは、この世は^{スクリン}幻影のまやかしの幕^ダと言った。だが、あの御方の蓮華の御足にしつかりした信仰を持てば――

この世は楽しい遊び小屋

私は食べたり飲んだりして

愉快に遊んで暮らしていく

ジャナカ王は偉大なお方

不足のものとて何もなく

こちらもあちらもしつかりと保ち

コップに溢れるミルクを飲んでいた

(一同大笑)

こちら――この世の幸、あちら――靈性

〔ブラフマ協会とジャナカ王——在家の修行方法——静処に独坐することと識別^{ウイウイカ}〕

「けれども、一足飛びにはジャナカ王のようにはなれないよ。王は一人で沢山のきびしい修行をしたのだ。世俗で生活していても、時々は一人で住むようにしなさい。世間の外に一人で行って、たとえ三日でも至聖の主を求めて泣けば、それだけで大変になる。暇な時があったら、一日でもいいから一人であの御方のことを考えるようにすれば、とてもためになるよ。人は女房や子のためなら瓶^{かめ}いっぱい涙を出して泣くが、誰が神のために泣いている人があるかい？ 時々一人になって、至聖の主を礼拝しなけりゃいけないよ！

世俗で生活していろいろな仕事の真っ只中にいると、修行^{サイダナ}の最初の段階の人は、気持ちを集中させようとしても邪魔されることが多くていけない。道端に生えている樹のようなもので、若いうちは囲いをしてやらないと牝山羊^{めやぎ}どもに食べられてしまう。はじめの間は垣根が必要なのだ。幹が太くなれば、もう垣根はいらない。そうなれば象をつないだって大丈夫だ。

チフスにかかっているようなものだ。そして、チフス患者の部屋に水の入った大きな水差しとタマリンドの漬物^{ピクルス}の壺^{びん}が置いてある。もし病気を治したいと思ったら、(患者を)部屋から出して別の場所に移してやらなければならぬ。世間の連中はチフス患者のようなものさ。勤めや商売は大きな水差し、いろんな物事に対する欲は喉の渴^{かわ}きと同じだ。タマリンドの漬物^{ピクルス}のことを思い出すだけでも口にツバが湧いてくるんだから、そばに置いてあっちゃどうしようもない。それなのに、そういった品物に取り囲まれているんだ。女との交際などは一番おいしい漬物^{ピクルス}だ。だから、一人にして治療することが必

要なんだよ。

ヴアイウエーカ ヴァイライキヤ

識別と離欲の力を得てから社会生活をしなさい。この世の海には愛欲とか怒りとかいう名のワニどもがうようよしている。だが、ウコンの根汁を体に塗り付けておけば、ワニなんてちつとも恐くない。識別と離欲の力がそのウコン根汁にあたるわけだよ。ホンモノとニセモノを見分けることを識別というのだ。神だけが真実であり、善であり、永遠の实在。そのほかはすべて皆、錯誤まちがひであり、年中移り変わる頼りにならないものだ、二日程しか続かぬものだ、心の底から理解することだ。も一つ大事なことは、その上で神様を心から慕うことだ。好きで好きでたまらなくなることだ。プリンダーヴァンの乳ゴしぼり女ビたちは、クリシユナに対してちようどそんな気持ちになった。まあ、歌を一つ聞いてごらん」

〔方法は——神への熱愛——愛着ゴか乳ビしぼり女達ビのような愛か〕

竹笛がひびくよ あの森に

(私は行かずにいられようか)

(シャーマが道に立っている)

行くか行かぬか お前たち

お前のシャーマは空しい言葉

私のシャーマは心のうずき

お前はあの笛 耳で聞く

私はあの笛 胸で聞く

シャーマの笛はこうひびく

お前たち みんないればこそ

森は楽しく美しい

タクルは、目に涙をいっばいためてこの歌をおうたいになり、ケーシャブはじめ他のブラフマ会員たちにこう言われた。

「あなた方、ラーダーとクリシュナの話を信じてでも信じなくても、この愛情だけは素直に認めなさいよ。至聖なる主をこんなふうに関心慕えるように、一生懸命工夫しなさい。夢中になって恋い慕いさえすれば、きっとあの御方をつかまえることができるよ」

ケーシャブ・セン氏らと共に船の旅——万物の幸福を喜ぶ

そして 諸々の感覚を抑制し

あらゆる生きものを平等に扱い

万物の幸福を喜ぶ人たち——

彼らも終にはわたしのもとに来る

——ギーター 12—4——

潮が引き始めた。蒸気船はカルカッタへ向けて速度を速めている。橋の下を通り過ぎて、植物園の方角へ向かってもうすこし船をやるようにと、船長は命ぜられた。どのあたりまで船が来たのか、大部分の人々は知らなかった。彼等は夢中になって聖ラーマクリシュナの言葉を聞いていたからである。時間の経つのも分からなかった。

やがて一同に、米菓子(塩味のボン菓子)とココナッツが出された。皆は衣服の前の折り目に適當の量を受けて食べている。一段と楽しい雰囲気になっている。ケーシャブは米菓子を用意してきたのだ。この合間にタクルは、ヴィジャイとケーシャブの二人が互いに意識して、いかにもぎこちなく坐っているのに気が付かれた。するとタクルは、ききわけのない男の子を扱うような調子で、仲直りさせるよう心をお配りになる。このお方は、万物の幸福を喜ぶ人(サルヴァ・プータ・ヒテー ラターハ/サンスクリット)なのだ。ケーシャブに向かつて——

聖ラーマクリシュナ「ほら！ ヴィジャイさんが来ておいでだよ。あんた方のケンカは、そうだ、ちよūd大シヴァとラーマの戦いみたいなものだ、アハハハハ。ラーマの師匠はシヴァだった。時には争いもしたけれど、二人の間には変わらぬ友情があった。しかし、シヴァの従者の鬼神たちとラーマの従者の猿たちは、いつまでもしかめっ面をして、訳のわからんことをブツクサ言つて、終わりが

なかつた！」

部屋は爆笑の渦である。

「親子、兄弟の間だつてそんなことは起るさ。ラーマは息子のラヴァアやクシャとも戦いをなすつた。それに、母親と娘が別々に、火曜日(祝日)の幸運を祈る断食行をしていたりする。まるで、母親の幸福と娘の幸福が二つ別物のようにね。だが、こちらの利益(ため)になるものはあちらの利益にもなるし、あちらにとつていいものはこちらにもいいのだ。それと同じで、あんた方にはここに一つの宗教団体があるし、そして、あちらにも一つ必要というわけだ(一同笑う)。だから、あれもこれもあつた方がいい。神様がこの世で活動なさる場合だつて、ジャティラやクティラ(二人とも騒動を起こす乳しほり女)みたいなゴタゴタを起こす人物が必要なんだよ。なぜだつて？　そういう悶着(もんぢやく)者がいないと仕事の舞台が進まないからさ(一同笑う)。そういう役者がいなければ芝居が面白くないよ」(爆笑)

ラーマヌジヤは制限不二論者だつた。だがあの人の師匠(ツル)は不二元論者だ。結局のところは、二人は違う考えだつた。師弟はお互いに反証をあげて争つた。こんなことはよく起ることだよ。起こつたからつて、お互い一番親しい霊の身内なんだよ」

ケーシャブへの教訓——偽教師(にせツル)とブラフマ協会——グルはサッチダーナンダ(ただ)唯一つ

あなたは全宇宙の万生万有の御父(おんちち)

すべてのものが拝み従う無上の導師

あなたと同様な者は無く同座できる者も無い

測り知れぬ力をもつ御方よ あなたに勝る者は三界に皆無です

——ギーター 11—43——

一同はたいそう喜んでいた。タクールはケーシャブに言われる——「あなたは、生まれつきの性質をよくみて弟子を選ばないから、それで次々と離れて行くんだよ。人は見たところは皆同じようだけれど、それぞれ持つて生まれた性質が違うのだ。落ち着いた調和のとれた性質(サットヴァ性)の人もいるし、派手に動きまわるのが好きな性質(ラジャス性)の人もあるし、反対に、のんびり怠けているのが好きな(タマス性)人もいる。プリという菓子は見た目はどれも同じ形だ。けれども中身は別だ。ミルクが入っているのや、ココナッツの実が入っているのや、カライ豆の煮たのが入っているのや、いろいろだ」(一同笑う)

「わたしはどんなふうだかわかるかい？ わたしは気楽に食べたり飲んだりして、あとのことは一切大実母まかせだ。ただ、わたしにはトゲみたいに突き刺さる三つの言葉がある。霊の教師と行為者と父だ。

(訳註2) 火曜日の断食行——神様ごとに礼拝に適した曜日が定められているが、ここでは、火曜日に礼拝する神さまを家の祭神として祀っていたので、家の者は祈願を込めて断食をして礼拝する様子が述べられている。

グルはただ一つ、サツチターナンダ(サット・チット・アインダ)だけ。あの御方だけが教えて下さる。わたしはあの御方の子供だ。私はグルだクなんて言っている人間が何十万といる。みんなグルになりたがる。誰も弟子にはなりたがらない。

人を導くことは、たいそう難しいことなんだよ。あの御方が直じかに会って下さって、お命じになったのなら出来るがね。ナーラダやシュカデーヴァたちは命じられた。シャンカラの場合もそうだ。あの御方のご命令がなかつたら、いったい誰があんた方の話を聞こうとするかね？ カルカッタの、あの目茶苦茶な騒がしさを見なさいよ！ 鍋の下に火が燃えている間は、牛乳はプープーいって噴きこぼれる。火を止めればもう音はしない。カルカッタの人たちはまあ、落ち着きがないね。水が要いるからと言って井戸を掘っていたかと思うと、ちよつとした石に突き当たつたらもう止めてしまう。又、別な場所を掘り始める。そこじゃ砂が出てきたと言ってまた止めた！ またまた別の所を掘り始める。すべてこんな具合だよ！

それからね、心の内でお許しをいただいたような気がする、とかいう程度のもものではダメなのだ。あの御方はね、実際にアリアリとしたお姿で人に会って下さるし、お話して下さるのだよ。そのとき初めて、人に教えなさいクというご命令を受けるのだ。そういう人の話は、どんなに力強いと思う？ 山も動き、岩も波打つほどだよ。だが、ただの講演はどうだ？ 二、三日くらいは人も憶えているかも知れんが、じきに忘れてしまう。ああいうものは言葉のあやだけで、ものの役には立たんよ」

「昔話——ハルダル池のこと」

「私の郷里にはハルダル池という名の池がひとつある。池の端に毎日、時も構わずに近くの人たちが大小便をしていたものだ。年中やって来ては汚し放題、まったくひどい有様がずっと続いていた。便所代わりになっていた（一同笑う）。誰かが見かねて役場に知らせたんだらう、役場の記章をつけた人が一人やってきて、『大小便するべからず』と書いた立札を立てた。そのとき以来、皆パツタリしに行かなくなった（一同笑う）。

人を導こうとするなら、そういう記章が要るんだよ。そうでないと笑い話にされるのがオチだ。自分でさえうまくいかないのに、まして他人を導くなんて——。盲人が盲人の道案内をするようなものだ、ハハハハハ。ためになるどころか害になるよ。至誠をつかんだ人は心眼が開けて、誰がどんな心の病にかかっているのはつきり分かるし、それに合った助言をしてやることもできるのさ」

「我執アノカミの雲におおわれた魂は私が為しているキョウキと思ひ込む」

「神様のご命令もないのに、私は人に教えてやっているのだ」という。これが我執、高慢というやつだ。これは無智から生じる。無智だから、私がしていると感じるのだ。唯一の神が行動者であり、神こそがすべてをなさるのであって、私は何一つしていない——こう感じるようになれば、これこそ生前解脱者ジウヴァンムクタ（この世に肉体を持ちながら解脱した人）。私がしている、私がやっていると思っている限り、悩みは続くし不安は尽きない」

ケーシャブはじめブラフマ会員たちにカルマ・ヨーガに関する教訓

故に仕事の結果に執着することなく

ただ為すべき義務としてそれを行え

執着心なく働くことよって

人は至上者のもとに行けるのである

—— ギーター 3 — 19 ——

聖ラーマクリシュナは続けて、ケーシャブはじめブラフマ会員に向かって語られた。

「お前さんたちはよく、世界のために尽くすなどという。世界はそんなに小さいものなのかい？ 世界のためにサービスするとかいう、その自分はいったい何者なんだね？ 霊の修行を積んで、直にあの御方に会ってみる、あの御方をつかんでみる。あの御方からお力を与えてもらって初めて、ほんとに皆のためになることが出来るんだ。それ以外にないよ」

一信者「神をつかむまでは、どんな仕事もしてはいけないのですか？」

聖ラーマクリシュナ「いや、なぜ仕事をしてはいけないんだね？ 神様を想うこと、御名を讃える歌をうたうこと、こういう永遠に滅びない仕事(ニティヤ・カルマ)をすることだ」

一ブラフマ会員「世間の仕事は？ 勤めとか商売とかの仕事はどうなのですか？」

聖ラーマクリシュナ「ああ、それもいいよ。生活していきけるだけの仕事は必要だ。だが、そういう仕事が無私の気持ちで出来るように、時々、静かな処で一人になって神様に泣いてお願いしなさい。そして、こう申し上げなさい——『神さま、お願いです。世間の仕事を減らして下さい。さもないと御承知のように、私はすぐたくさんの仕事に巻き込まれてあなたを忘れてしまいますから——。無私の仕事をしていると思っても、いつの間にか欲が出てしまうのです』と。それから、寄付や慈善事業などをあまりやり過ぎると、とかく名譽欲（とりこ）の虜（とら）になってしまうものだ」

〔昔話——シャンブー・マリツクと慈善活動などについての話〕

「シャンブー・マリツクがいつか、病院、施薬所、学校、道路、貯水池などの話をしていて。私は言うてきかせたよ。自分の目の前にある、どうしてもしなけりやならない事だけをしている。それを無私の気持ちでするように努めろ、と。あんまり沢山の仕事に巻き込まれないように気を付けなくてはいいよ——神様を忘れてしまうからね。カーリーガートの寺院（カルカッタ北部）で、乞食（ほど）に施（ほ）しばかりしていて、カーリー大実母（マ）にお詣りするヒマもない。ハツハツハ……。先ず人を押し分けてもカーリーに参拝をして、それから施（ほ）しをしようとすまいと勝手だがね。そうしたいと思つたら、大いにやんなさい。神様をつかむための仕事なんだ。シャンブーに、だから言つて聞かせたよ。もし神様がお前に会つて下さつたら、あの御方に病院や診療所を作ってくれ、などという話をするつもりかね、と。はつはつは、信仰者というものはそんなことは言いはしない、こう言うんだ。タクル！ 蓮華の

御足元に私の居場所を下さい。いつもいっしょに居て下さい。蓮華の御足への信仰が清く正しいものでありますように。

奉仕の道(行為を通して神と合一する道)は、ものすごくむずかしいよ。聖典に書いてあるような行為を全部、現在の時代(カリユガ)に実行することは、とても、とてもむずかしいことだ。食べなけりや生きていられないからね。だから、聖典に書いてあるたくさんの行為は出来ないんだよ。ひどい熱が出た場合、カヴィラージ療法(この土地に前から伝わる治療法をしていたら間に合わない。今どきはD・グプタ(強力な解熱剤)がいいのだ。現代には信仰の道が一番、至誠の御名を称え、讃歌を歌い祈ることだ。バクティ・ヨーガこそ現代の宗教だ。ブラフマ会員のあなた方も信仰の道だね。ハリの名を称えるし、大実母の名を讃える歌をうたうし、あなた方は恵まれているよ！あなた方のやり方はとてもいいよ。ヴェーダーンタ派の人たちのように、この世は夢まぼろしだなんて言わないしね。あなた方は、ああいうブラフマン智の行者じゃない。あなた方は信仰者だ。あなた方は神には人格があるという、それも結構だよ！あなた方は信仰者だ。一心不乱になって呼べば、きつと、あの御方に会うことが出来るよ」

スレンドラの家でナレンドラたちと共に

船はカヤラガートに錨を下ろした。一同は降りる支度を始めた。船室の外に出てみると、十五夜の月がガンガールの水面に満面の笑みをたたえ、岸辺の大小の樹々にそのやさしい光を注いでいる。タクル、聖ラーマクリシュナのために馬車が呼ばれ、間もなく校長と一、二の信者といっしょに、タクル

ルは馬車にお乗りになった。ケーシャブの甥のナンダラルも馬車に乗ったが、タクールのお供をしてしばらく乗って行くつもりなのであろう。

皆が席についた後、タクールは、「あ、あの人はどこにいるのかな。ほら、ケーシャブはどこにいる？」とお聞きになった。早速ケーシャブは一人で前に進み出た。ニコニコしている。そして、「誰がタクールといっしょに行くんだい？」とお聞きになった。皆がすっかり席に落ち着くと、ケーシャブは額めかずいてタクールを礼拝し、御足の塵をいただいた。タクールは、愛情を込めて別れの挨拶を交わされた。

馬車は進んで行った。英国人の住宅地で美しい大通りである。通りの両側には立派な美しい邸宅が並んでいる。満月が中天に掛かり、その清く涼しげな光を浴びながら、邸宅の群れは静かに休息しているようだった。門ごとにガス灯がつき、ランプの明るい部屋が続いて、そこかしこからハルモニウム（インド式オルガン）やピアノにあわせて西洋の婦人たちが歌をうたっていた。タクールは楽しそうにニコしながら通りすぎて行かれた。と突然、「のどが渴いた。どうしよう？」とおっしゃった。どうもこうもない！ ナンダラルはインドクラブの近くで馬車を止め、入って行ってガラスのコップに水をもたらってきた。タクールはにっこりして、「コップはちゃんと洗ったかい？」とお聞きになった。ナンダラルの「はい」という答えを聞いて、タクールはそのコップから水をお飲みになった。

まるで子供のように、タクールは進行中の馬車の窓から精一杯頭を突き出して、あたりの人々だの馬や車、降りそそぐ月の光などを眺め廻しておられる。それを見てお供の者一同、何とも楽しい気分である。

ナンダラルはカルトラで降りた。タクルのお乗りになつて馬車は、シムリヤ街のスレシユ・ミトラ氏の家の門に入つていった。タクルは彼のことをスレンドラと呼んでおられる。スレンドラはタクルの熱心な信者である。

あいにく、スレンドラは不在であつた。彼は新しく造つた庭園のほうに行つていたのである。家の人たちが、一階の一部屋を空けてお迎えした。馬車を払つてやらなくてはならないのだが、誰が出すのだろう？ スレンドラが在宅ならもちろん彼が出すに決まつているのだが――。タクルは信者の一人に言われた。「車代は、女の人たちのところへ行つてもらつてくればいいのに――。連中はよく知っているよ、自分たちの旦那さんがよくわたしのところへ来ることをね」皆はどつと笑い崩れた。

ナレンドラが同じ町内に住んでいる。タクルはナレンドラを呼びにやつた。その間、家の人々は二階の部屋にタクルをご案内して坐つていただいていた。部屋の床には白布が敷かれ、その上に数個のクッションがおいてある。壁にはスレンドラが特別念を入れて描かせた油絵が掛かつている。それには、タクルがケーシヤブに、ヒンドウ教、イスラム教、キリスト教、仏教がすべて同根であること、また、ヴィシユヌ派、シャクテイ派、シヴァ派など、すべての宗団のもとと同根であることを教示^{しめ}している図柄の絵である。

タクルはお坐りになると笑いながら雑談をされておられたが、そこへナレンドラが到着したので、ご機嫌の良さは二倍になつたようだ。タクルはナレンドラにおつしやる。「今日はね、ケーシヤブといつしよに船に乗つてきたよ。ヴィジャイもいたし、皆いたよ」そして校長を指してこうおつしやる。

「この人に聞いてごらん、わたしがヴィジャイとケーシャブに何て言ったか、母親と娘の断食のことや、それに、ジャティラやクティラみたいな悪役がいないと芝居が面白く進まないって話を――。」

(校長に) なあ、そうだったな？

校長 「はあ、その通りでございます」

夜になったが、スレンドラはまだ帰宅しなかった。タクールがドツキネーシヨル南神村にお戻りになるのに、これ以上遅くなるわけにはいかない。夜の十時半になっていた。道はこうこうたる月光に照らされている。

馬車が来た。タクールはお乗りになった。ナレンドラと校長はそれこあいさつをしてから、カルカッタにある各々の住居に戻っていった。